瀬戸内における石の文化

瀬戸内における石の文化

１．瀬戸内海における石の歴史

瀬戸内海の地形的な特徴は、瀬戸内海は本州、四国、九州に囲まれた水深の浅い閉鎖性の海域で、豊後水道、紀伊水道、関門海峡を通じて外洋と接していることである。

地質的には、瀬戸内海沿岸部や島は、白亜紀から古第三紀の花崗岩類（下図の桃色部）で構成されている。四国の中央構造線の南北で著しい違いが見られ、瀬戸内側に花崗岩が多く、その浸食によって多量の砂が生みだされ、白砂青松のもとになった。四国の花崗岩が分布している地域の南側には、白亜紀後期の堆積岩からなる和泉層群や結晶片岩からなる三波川変成岩類が分布している。また、山口県、香川県、愛媛県の一部に瀬戸内火山岩類が、九州には阿蘇山、九重山等の第四紀の火山もある。図１に瀬戸内海地域の地質図を示した。

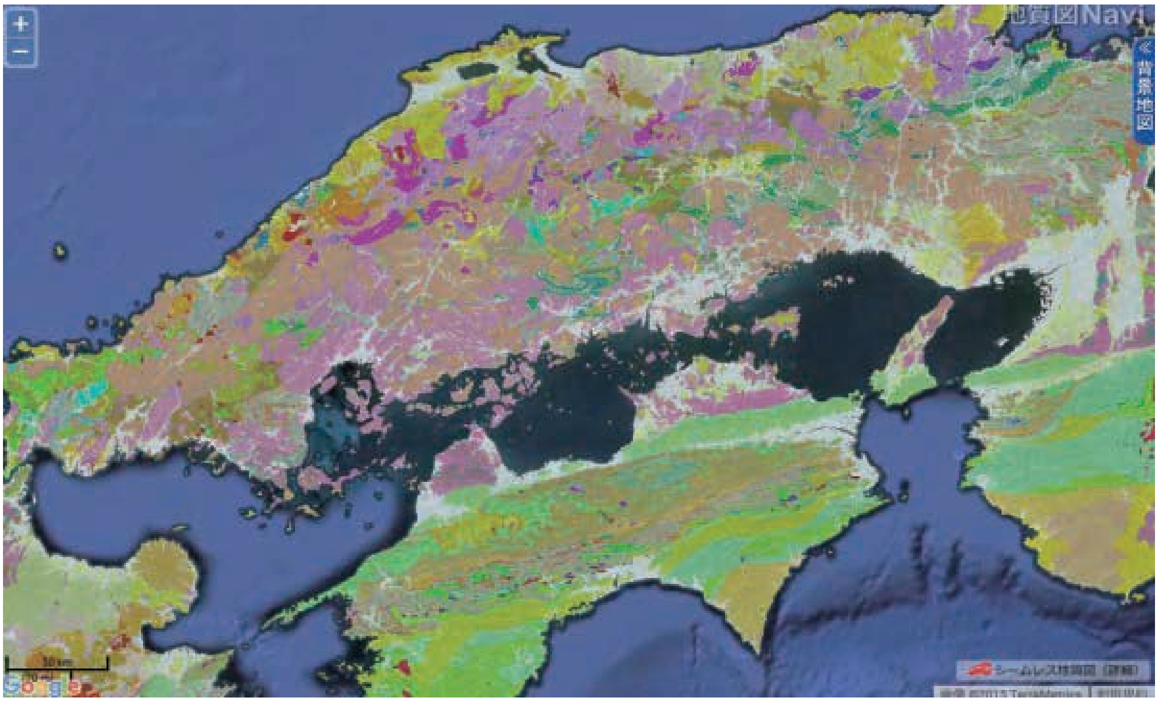


図１　瀬戸内海の地質図（出典：産総研シームレス地質図）

（石材利用の変遷）

旧石器時代～弥生時代

瀬戸内海における人類の活動は、旧石器時代にさかのぼるとされており、その時代から瀬戸内海で産する石が使われていた。瀬戸内海で産出する石器（刃物）として利用された石材としては、黒曜石（大分県姫島）、サヌカイト（香川県五色台・金山、兵庫県岩屋、奈良県二上山）で、サヌカイトは旧石器から弥生時代にかけて、黒曜石は縄文時代を中心に利用された。瀬戸内海各地の旧石器から弥生時代の遺跡から、黒曜石、サヌカイトが出土していることから、石を通じての交流があったことをうかがわせる。

黒曜石

サヌカイト

古墳時代

古墳時代になると加工が容易な軟質石材凝灰岩が主に使われ、石灰石や砂岩も一時期利用された。豪族が権威の象徴として古墳をつくり、石室内に死体を入れる棺を納めた。棺は木製のほかは凝灰岩製で、産地も限られていた。香川県の高松市国分町の「鷲の山石」とさぬき市の「火山石」は古墳時代前期後半、九州の阿蘇山の「阿蘇石」は前期後半から中期に利用された。石材は船で運ばれ、瀬戸内の航海に関わった有力首長の墓に使われたという。有明海沿岸の宇土半島の凝灰岩は中期末から後期に、近畿地方まで運ばれ利用された。兵庫県の「竜山石」は中期の畿内の巨大古墳や西瀬戸内海の山口県まで運ばれて利用された。その他大阪府・奈良県境の二上山石等が使用された。

石棺（大阪府立近つ飛鳥博物館）

飛鳥時代～平安時代

飛鳥時代に仏教が渡来すると、石造部の工人たちは仏教関係の石造物をつくるようになる。すでに奈良県の石棺の一部分に六弁の蓮華文を浮き彫りにしていたのである。飛鳥時代以降、飛鳥寺の塔の中心礎石や法隆寺金銅の基壇などは、石を加工してつくられた。

７世紀後期には朝鮮半島における百済滅亡の時期から、唐、新羅軍が日本に攻めてくることを想定し、百済の技術者により朝鮮式山城が築かれ、日本初の城の石垣が誕生した。

奈良時代になると奈良県を中心とした畿内に、仏教関係の石造物として石塔・石仏・石燈籠などがつくられた。花崗岩製の石造物がまざるのは、渡来人のなかに硬質石材を加工できる人がいたのである。

平安時代は密教が盛んになり、その影響をうけて宝塔・多宝塔・五輪塔などが造られた。さらに鳥居や磨崖仏なども造られ、奈良を中心とした畿内から全国に石造文化は広がっていった。瀬戸内地方では、大分県は臼杵磨崖仏と同所中尾五輪塔、岡山県は真鍋島の宝塔などがありいずれも凝灰岩製である。

真鍋島の宝塔
（笠岡市商工観光課提供）

中世（鎌倉時代～安土桃山時代）

日本の石材加工の転換期は、中世初期に硬質の花崗岩の加工が容易になったことである。一挙に花崗岩の石仏や石塔類が全国に広がり、数量も増えた。花崗岩の加工技術は東大寺再建のために中国から新しい技術を導入したことが契機になっている。新しい技術は畿内から、良質な花崗岩が多い瀬戸内地方にも広がった。初期の石塔などには石工銘を彫っているので、良質の花崗岩をもとめて瀬戸内地方に出張してつくったと考えられる。たとえば「念心」は、三原市の米山寺と大三島の大山祇神社の宝篋印塔、三原市佐木島の割石地蔵磨崖仏に石工として登場する。いずれも優品ばかりで、大和を中心に活躍していて、出張してきた石工と考えられる

米山寺の宝篋印塔
（印南氏提供）

中世は武家の時代で、豪族は氏寺に供養のため石塔を好んで建立した。瀬戸内地方では、中世に新しく登場した宝篋印塔が数多く建立された。瀬戸内地方は、中世を通じて石仏・石塔の花崗岩文化が継承され、近世の墓碑や社寺への奉納物などにつながっていった。

鎌倉時代に元寇の襲来に備え、幕府が博多湾沿岸に「石築地（いしつじ）」と呼ばれる石垣堤防を作らせた。本格的に城郭造りのための石積技術が発達したのは中世末の安土桃山時代以降で、織田信長が滋賀県にいた石工職人の穴太衆（あのうしゅう）に安土城を作らせたことから支配地に石垣作りの城が作られ始めた。豊臣秀吉が築城し徳川家康が再興した大坂城の石垣が日本最大のものとされている。また、西日本の城に石垣が備わっているのに比べて、東日本の城には小規模の石垣が見られるに過ぎない。この石垣に用いられた石材は、瀬戸内海沿岸地域で産出する花崗岩でできており、固くて丈夫なので、城の土台としての石垣に最適であった。

現在の大阪城石垣

近世（江戸時代）

城郭造りの石積技術は、江戸時代の塩田や棚田、波止、雁木、石橋、石風呂などに継承された。入浜塩田を波からまもる堤防は丈夫でなければならず、瀬戸内地方の花崗岩と石積み石工が活躍した。

硬質石材の加工技術が発達して広く利用されると、軟質石材の砂岩は安価な石塔や狛犬、凝灰岩は移動式の竈、流しなどの生活用具として近代まで利用された。

凝灰岩製の船上竈
（印南氏提供）

明治時代～

近代における瀬戸内海で産出する石材の利用は、建築資材（国会議事堂、日本銀行本店、関西国際空港、燈台等）や墓石等としての利用が多くなるとともに、戦後の高度経済成長期には瀬戸内海各地で埋め立て工事や空港等の大規模建設工事が進められ、瀬戸内海各地の石材も大量に使用されてきた。

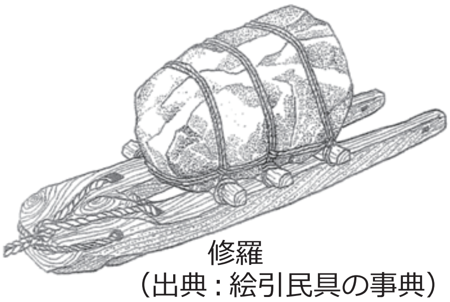
現在の国会議事堂

（石の運搬の歴史）

古い時代に大きくて重い石材を、どのように運んだのだろうか。縄文時代から刳（くり）船の造船技術はあったが、弥生時代後期に鉄器を使いはじめて造船技術はさらに進歩する。それまでの単材の刳船から、２材以上をつないだ複材の刳船ができる。古墳時代には両舷に棚板をつけた、構造船に近い大きな船もつくられていた。

古墳時代の石棺の輸送についてはいろいろな考え方があった。２艘の船を平行に等間隔にあけて並べ、丸太２本を船の前後に渡す。２本の丸太に綱で石をつり下げて運んだというのが一番納得できる方法である。石を海面下に沈めることで少しでも浮力をつけて、船にかかる重量を減らしたのであろう。

陸上では巨岩や巨木を運ぶ「修羅」・「股櫪」などにより運ばれた。



修羅
（出典：絵引民具の事典）

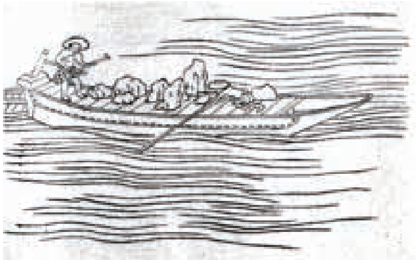
中近世の石材運搬法については、どんな船が、どのようにして運んだのかわかっていない。日本は海洋大国でありながら、和船の資料がほとんど残っておらず、研究者も少なかった。石材の輸送は重い石を運ぶため、船がいたみやすく、船体構造にも工夫があったはずである。

近世中頃に出版された『和漢船用集』は、和船資料が少ない近世の唯一の船の百科全書といえる。全１２巻で、各巻ごとにテーマが違っている。「石船」は第４巻と第５巻に、解説と図が掲載されている。

第４巻は、和漢の海船を紹介した巻である。中国の明代の『武備志』に、石を運ぶ船を「山船」とよぶと紹介している。日本では地名でよび播州の御影の石船は御影船、紀州では紀州石船とよんだ。また、石船の形は地域で違っていた。図では、石を積んだ石船を、大型の櫓を２人一緒にこいでいる。

海船の石船（出典：和漢船用集）

第５巻は、江湖川船を紹介した巻である。摂州で石を運ぶ川船は、団兵衛とよんだ。ただし団兵衛は、石を積む船だけとは限らなかった。石船は船側（船縁）の上に板を並べて釘付けしていた。その板の上に石をのせて石を運搬した。図では、石を積んだ船に２人の船頭が前後にわかれて乗っている。艫（後方）の船頭は片手で舵、片手で櫂をもって操船し、舳（前方）の船頭は竿をさして船をすすめている。



江湖川船の石船（出典：和漢船用集）

近代、特に戦後は高度経済成長期には瀬戸内海各地での埋め立て工事等で浅瀬に石を投入する木造の石運搬船が、更には空港等の大規模建設工事で大量の石を運搬するためガット船（グラブ付自航式運搬船）が作られた。瀬戸内海には、広島県似島（にのしま）、兵庫県家島（いえしま）にガット船の基地が作られている。その他、陸上交通網（高速道路等）の整備が進み、陸路でも石材が大量に輸送されるようになった。

ガット船の停泊地（兵庫県家島）

木造の石運搬船（撮影：脇山功氏）

このように、瀬戸内海は石の産地として古くから人の営みに深く係るとともに、石の流通経路として大きな役目をはたしてきた。

２．瀬戸内海の主な石の産地

名　　称	特　　徴
御影石（みかげいし） （兵庫県神戸市）	兵庫県六甲山南麓、神戸市東灘区御影地方で採石される花崗岩の石材を御影石と呼んだのが始まりで、それが花崗岩や花崗岩の石材の通称となった。特に御影地方のものは、本御影とよばれ区別されている。本御影は中粒の黒雲母花崗岩で、肉紅色のカリ長石を含むため肉紅色を呈し、御影石の中でもっとも美しいとされる。 （参考：日本大百科全書）
竜山石（たつやまいしし） （兵庫県高砂市）	兵庫県高砂市竜山にある岩山で、相生層群の流紋岩質塊状凝灰岩によりできている。竜山石は適度な硬さと粘りがあり加工に向いていることから、古墳時代に石棺の石材として切り出されてから、約 1700 年にわたって採石されている。また、この竜山石の岩盤を掘りこんだ巨石遺構が「石の宝殿」である。「石の宝殿」は横口式石槨を作ろうとしたが未完成のまま放置されたものであろうという説が有力である。12 世紀の文献には、生石（おうしこ）神社の御神体として祀られているという記述があり、宮崎県天の逆鉾などとともに、日本三奇とされている。平成 26 年に国の史跡に指定された。 （参考：ひょうごの地形・地質・自然景観　神戸新聞総合出版センター発行）
和泉砂岩（いずみさがん） ・和泉石（いずみいし） （大阪府阪南市、泉南市） ・撫養石（むやいし） （徳島県鳴門市）	西南日本を縦断する中央構造線に並行して、和泉山脈から阿讃山脈の一帯で分布する白亜紀後期の和泉層群は、良質の砂岩が産出することで知られる。このうち、和泉山脈で産するものは「和泉石(いずみいし)」、阿讃山脈のものは「撫養石(むやいし)」と呼ばれる。 和泉石は、近世以降、和歌山城や岸和田城をはじめ、泉南地域の民家や田畑の石垣にも多く使用されたほか、「泉州石工」の手により狛犬・石灯籠などが作られ、瀬戸内海各地の神社に多く奉納された。また高い技術をもつ泉州出身の石工集団は、瀬戸内海の花崗岩産出地域にも多く進出し、各地で石材加工業の発展を担った。 和歌山城の石垣

名　　称	特　　徴
	撫養石は、主に徳島県鳴門市(撫養)で産出し、古くは古墳時代の石室に使用され、その後、吉野川下流域を中心に神社の石像物や民家などの石垣にも多く使用された。また近世以降は、鳴門の塩田地帯を縦横に巡る水路堤敷の石垣として多用された。 塩田水路の石垣
白川石（しらかわいし） （京都府京都市）	京都市の比叡山から大文字山付近に露頭する黒雲母花崗岩。平安時代から石塔等に利用され、安土桃山時代には伏見城や大坂城、方広寺等の石切場となっている。また、白川石が風化した白川砂は神社や庭園の白砂として広く用いられている。
庵治石（あじいし） （香川県高松市）	庵治石とは、細粒黒雲母花崗岩という石英、長石を主成分とし少量の黒雲母と角閃石を含む石のことで、八栗五剣山の西麓で採石されている。江戸時代には高松藩の御用丁場になったといわれており、主に墓石、灯籠、石彫などに利用されている。 （参考：高松市牟礼庵治商工会 HP）
サヌカイト （香川県）	サヌカイトは、瀬戸内海火山岩類に属し、天然ガラスを多く含み、非常に緻密な古銅輝石安山岩である。エッジ状に割れやすく、断片のエッジは鋭く切れ味が良いため、旧石器時代から弥生時代にかけて石器として利用された。尖頭器、ナイフ形石器、スクレーパなどの石器に利用されてきた。主に香川県（五色台、金山、城山など）で産出することから、ドイツの学者ワインシエンクにより「サヌカイト」と命名された。 サヌカイトは、固いもので叩くと高く澄んだ音がするので、カンカン石とも呼ばれ、楽器としても利用されている。
サヌカイト （二上山：大阪府・奈良県の県境）	二上山（にじょうざん）は金剛山地の北部に位置する山で、石器として使用されたサヌカイト（安山岩）の産地である。二上山麓には、旧石器時代から弥生時代にかけての遺跡が数多く発見されており、二上山北麓遺跡群と呼ばれている。
豊島石（てしまいし） (香川県土庄町)	豊島石は、角礫凝灰岩と言われる加工しやすい石であるため、鎌倉時代から採掘され、灯籠用原石として全国各地で用いられてきた。石灯籠としては、京都の桂離宮や二条城、大阪の住吉神社のものが有名である。水に弱く風化しやすい欠点があるが、熱に強く 1350 度から 1450 度くらい耐えられるため、現在では茶室の炉などに使われている。壇山（檀山）の頂上近くに、明治 42 年（1909 年）から採掘されていた大丁場があるが、現在は閉鎖されている。

名　　称	特　　徴
議院石（ぎいんせき） （広島県倉橋島、山口県黒髪島）	議院石は広島県呉市沖合にある倉橋島、山口県周南市沖合の黒髪島から産出される花崗岩であり、国会議事堂や議院会館に使用されたことから、この名前がある。主に、墓石や建築物に利用されている。 （参考：歴史ある石材の島の交流会、中国経済産業局作成のリーフレット）
北木石（きたぎいし） （岡山県笠岡市）	北木石は、岡山県笠岡市、笠岡諸島の北木島で産出される花崗岩である。明治時代以降、日本銀行本店本館、靖国神社鳥居、明治生命館、東京駅丸の内駅舎等多数の歴史的建造物に用いられている。現代では主に墓石、建築材として利用されている。
赤間硯（あかますずり） （山口県宇部市、下関市）	赤紫色を基調とする山口県特産の赤間硯は、国の伝統的工芸品に認定されており、その名称は、古くから赤間関（あかまがせき：現在の下関市の旧市街）で制作されてきたことによる。現在は、宇部市の山で採石されており、宇部市や下関市の職人の手で硯に加工され、赤間硯の歴史を現代に伝えている。赤間硯の原石は質が硬く緻密なため吸水率も低く、粘りがあるため細工がしやすく、硯石として優れた条件を持っている。また、むらなく*鋒鋩があり密立しているので、磨墨、発墨も良く、のびの良い墨汁を得ることができる。硯の形は数多くあり、自然のままにとどめたものから、種々の彫刻を施した優美なものまである。角硯や丸硯などは端正な美しさと重量感のある実用を兼ねた愛好品、野面硯は原石の形を活かした大胆な造形と自然美に趣があり、彫刻は簡素なものから精緻なものまで幅広く、伝統的な形式を守りながら伝承されてきた技巧をあますことなく表現し、時代の特徴や傾向を如実に示している。 歴史的には、17 世紀初頭、毛利輝元の遺品として「天下一」「赤間関住（じゅう）大森土佐守頼澂（とさのかみよりずみ）」と銘の刻まれた赤間硯が防府市の毛利博物館に所蔵されており、江戸時代に萩藩から朝鮮通信使への贈答品として度々使われた記録がある。オランダのライデン国立民俗学博物館には、「akama ishi」の名称で １９世紀初期にシーボルトコレクションとして収集された赤間硯が所蔵されている。 ＊「鋒鋩」（ほうぼう）：石英などの小さな結晶で、墨をする際におろし金のような役割をするもの。
大島石（おおしまいし） （愛媛県今治市）	大島石は、愛媛県今治市大島で、700 年前から採石されている花崗岩で、石目、岩肌が美しく風化しにくいという特徴がある。青御影石として、宝篋印塔、墓石、建築物（国会議事堂、赤坂離宮、奈良帝室博物館等）などに利用されている。（参照：今治市 HP）

名　　称	特　　徴
伊予・阿波青石 （あおいし） （愛媛県西条市、徳島県）	四国の名石として、深緑色で独特の縞模様をした青石（玄武岩が変成を受けてできた緑色片岩）があるが、瀬戸内海では、愛媛県、徳島県の三波川変成帯の地域から産出することから、伊予青石や阿波青石と呼ばれている。主に、庭石、沓脱石、彫刻の台座などに利用されている。
エジル石閃長岩（えじるせきせんちょうがん） （愛媛県岩城島）	エジル石閃長岩は、瀬戸内海のほぼ中央に浮かぶ愛媛県岩城島で産出する岩石で、杉石や片山石などの新鉱物を含む特異な石として愛媛県の天然記念物に指定されている。また、近年の研究で岩石中から、リチウムを多量に含む非常に珍しい新鉱物「村上石」が発見され注目を集めている。
黒曜石（こくようせき） （大分県姫島）	火山活動に伴い流紋岩質マグマが高温高圧の状態から地上に噴出したり、地表近くに貫入し急冷した場合にできるといわれている。黒曜石は、黒色ないしは暗色の火山ガラスで、化学組成は流紋岩質、破断面は貝殻状になる。晶子や微晶を含み少量の斑晶を含むことがある。 姫島は、縄文から弥生時代にかけて西南日本に広く分布した黒曜石産地として有名である。通常の黒曜石は黒色であるが、姫島の黒曜石は乳白色を帯びたものもある。姫島の黒曜石の産地は、国の天然記念物に指定されている。 （参照：姫島村 HP）

瀬戸内海における主な石の産地

３．瀬戸内海の主な石の史跡

<table>
<tr><th>名　　称</th><th>特　　徴</th></tr>
<tr><td>石の宝殿及び竜山石採石遺跡
（兵庫県高砂市）</td><td>生石神社の御神体は巨大な石造物で、裏手に切妻風の突起を後ろにして家を横たえたような形で横約 6.5m、高さ約 5.6m、奥行約 7.5m、重さ約 500t もある。これは「石の宝殿」と呼ばれ、奈良時代の「播磨国風土記」に「大石」と記されている。水面に浮かんでいるように見えるところから「浮石」ともいわれているが、多くの謎に包まれ、宮城県塩竈市御釜神社の「四口の神釜（よんくのしんかま）」、宮崎県高原町霧島東神社の「天之逆鉾（あまのさかほこ）」と並んで日本三奇の一つに数えられている。いつ、誰が、何のために作ったのか、不思議な石造物として訪れた人の目を驚かせている。
　また、竜山の山中には竜山石の採石場が点在する。竜山石とは今から約 9000 万年前に形成された凝灰岩で、古墳時代から現在まで約 1700 年間採石され続けており、高品質で加工に適した石材として様々な石造物の製作に使われてきた。特に、古墳時代の大王の棺や江戸時代の建築材などに利用されるなど、竜山石の製品は、西日本各地に流通し、石の文化を伝えてきた。
　江戸時代の天保 7 年（1836 年）に、姫路藩の命で景勝地として「観涛処」の三大字が崖面に掘られた。観涛処の上からは南方の海を見渡すことができる。
　平成 26 年（2014 年）10 月 6 日に、「石の宝殿及び竜山石採石遺跡（いしのほうでん および たつやまいしさいせきいせき）」として、国の史跡に一括指定された （参照：高砂市 HP）

石の宝殿（生石神社のご神体）

竜山石採石遺跡

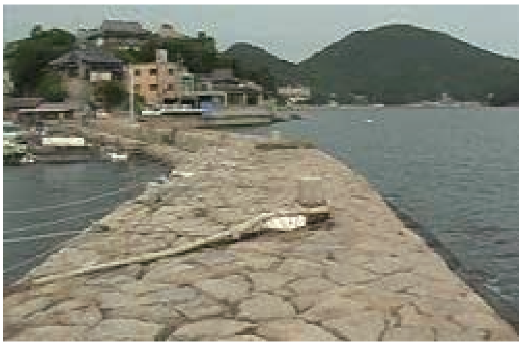
景勝地「観涛処」</td></tr>
</table>

名　　称	特　　徴
五色塚古墳 （兵庫県神戸市）	五色塚古墳は４世紀後半に築造された３段築造の前方後円墳で、墳丘の大きさは全長 194m、前方部の幅 82.4m、高さ 13m、後円部の直径 125.5m、高さ 18.8m で、周濠を巡らしている。下段の斜面には小さな石を葺き、中段及び上段の斜面には大きな石を葺いている。中段及び上段の葺石の多くは分析の結果、淡路島の東海岸から運ばれたものであった。下段の葺石は、主に地元の礫を用いている。使用された石の総数は、223 万個、総重量 2,784 トンと推定される。この他埋葬施設に用いられたと推定される石材に、徳島県産と判定された板状の石材を用いている。明石海峡を見下ろす場所に立地しており、海上交通と関りの深い有力者の墓と考えられている。古墳域は、大正 10 年（1921 年）に小壺古墳の古墳域と合わせて国の史跡に指定されている。 （参照：神戸市教育委員会文化財課 HP）
古代大輪田泊の 石椋（いわくら） （兵庫県神戸市）	大輪田泊と呼ばれた兵庫の港は、奈良時代に行基が築造したと伝えられ、遣唐使船の寄港地や平清盛による日宋貿易の拠点となった。この巨石は昭和 27 年（1952 年）の新川運河の浚渫工事の際に発見され、平清盛が築いた経ヶ島の遺材ではないかと想像されていた。しかし平成 15 年（2003 年）、この巨石が発見された場所から北西約 250m の場所で、奈良時代後半から平安時代中頃の港湾施設と推測している遺構と建物の一部が発見されたことから、この巨石は古代の石椋の石材であったと推定される。（参照：神戸市 HP） 石椋：石を積み上げた防波堤や突堤の基礎等の港湾施設 経ヶ島：平安末期に清盛が風よけのため築いたとされる人工島

名　　称	特　　徴
城山 （香川県坂出市）	城山には古代山城の遺跡があり、国指定の史跡となっている。また、城山の城跡は城山長者の伝説と結びついていて、坂出の昔話として語り伝えられている。 城山は朝鮮式山城とも神篭石とも呼ばれているが、今日では朝鮮式山城に類似する構造の城跡と考えられている。朝鮮式山城は７世紀後半頃の朝鮮半島の政治的緊張に伴い、日本国内の防御体制を整えるために築かれた城である。 このほか、山中にはホロソ石・マナイタ石と呼ばれる石製加工物が散在しているが、これらは城門の礎石ではないかと推測されている。ただし、ホロソ石一対とマナイタ石とで城門の礎石を組むと、その数が足りないことや、その発見場所が全く離れていたりすることなど不明な点が多く、破壊されたためではないかとか築造途中に放棄されたのではないかなど、諸説が考えられている。いまだ謎に包まれた遺跡である。 （参照：坂出市 HP） 城山のホロソ石
大坂城残石記念公園 （香川県土庄町）	戦国時代の終わり、冬・夏の陣で落城した大坂城を修築するために切り出されたが、使われることなく放置された約 40 個の残石を中心に大坂城残石記念公園が整備されている。公園内には、小豆島における石丁場、残石などに関わる写真や古文書のほかに、当時の石の運搬に使われた道具類や石工が使う用具類などが展示されている。また、当時の輸送方式法などが分りやすく再現されているほか、石づくり体験などもできる。 （参照：小豆島観光協会 HP） 大坂城残石記念公園

名　称	特　徴
池田の桟敷 （香川県小豆島町）	亀山八幡宮から 400m ほど西に離れた小高い丘に、石垣づくりの桟敷が築かれている。桟敷の規模は、長さは 80m、高さは約 18m、6～8 段の階段状になっている。石垣は、島内から安山岩、玄武岩、花崗岩などが集められ積み上げられたものである。 瀬戸内海に面して、自然の地形を巧みに利用した、石を野面積(のづらつみ)にした桟敷の傑作で、秋祭りの際、太鼓台や御輿、大練りなどを見物するために築かれたのではと言われている。構築年代についての資料は見当たらないが、『亀山八幡宮奉懸当社御祭礼之図』から文化 9 年(1812 年)以前ではないかと推定される。（参照：小豆島観光協会 HP）
石の民俗資料館 （香川県高松市）	牟礼･庵治の 400 年にわたって築き上げられた石の文化と歴史。石の民俗資料館では石工達の知恵と技術、優れた技能を伝えてくれる。 館内では、大正末期から昭和初期にかけての牟礼町における、石の切り出し、運搬、加工のそれぞれの風景を、等身大の人形を使ったジオラマでリアルに再現。また各工程で使用していた実物資料も約 1000 点展示しているが、これらの多くは陳列するだけではなく、実際に質感を感じてもらうため、手で触れることが可能となっている。
女木島のオオテ （香川県高松市）	女木島(別名鬼ヶ島)の東浦集落の海岸線に築かれた讃岐岩類で築かれた防風防潮垣をオオテと呼んでいる。強風から家を守るために明治初期から昭和中期にかけて作られ、民家の石垣よりも高く（約 4m）築かれていたが、高度経済成長以降、家の新築に伴い少しずつ景観が変わりつつある。

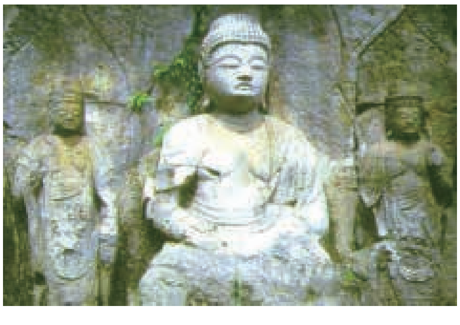
名　　称	特　　徴
佐田岬半島の石造物群 （愛媛県伊方町）	佐田岬半島には、鎌倉時代中期から江戸時代にかけて、五輪塔・宝篋印塔・層塔などの石造物が１４００点超確認されている。それらはすべて大分県、香川県、兵庫県などの地元以外の８種類の石材で、それぞれ各産地で作られ、瀬戸内海を通じて佐田岬半島に運ばれたものと考えられている。（参照：伊方町の石造物調査報告書Ⅱ）
浄土寺山の切り出し岩 （広島県尾道市）	尾道の繁栄は、嘉応元年（1169年）に備後国大田庄の年貢米積出港の公認港に定められてから始まり、江戸時代の寛文12年（1672年）に開かれた西廻り航路によって、尾道に北前船が寄港すると更に繁栄を極めた。北前船が、東北地方や北陸地方などの産物を運んできた後の、帰り荷として尾道の石材が積み込まれ、日本海沿岸に運ばれた。石材とともに尾道石工も各地に赴き、鳥居や灯篭をつくっていった。船底に石材を積むと船（千石船；北前船で使用されていた1000石以上の船）の安定にも一役買っていたという。石材の切り出し場としては、古くは市街地の背後、千光寺山や浄土寺山、対岸の向島であり、尾道は地質学的に花崗岩が多く、良質の石材にも恵まれていた。 （参照：尾道商業会議所記念館第９回企画展示-尾道と石工-）

名　称	特　徴
鞆の浦の雁木・常夜燈 （広島県福山市）	鞆港には、江戸期の港湾施設である常夜燈・波止（はと）・雁木（がんぎ）・焚場（たでば）・船番所跡の港湾施設 5 点セットが今も残っている。この 5 点セットが全て残っているのは全国でもここだけと言われている。 雁木は、潮の干満に関らず船着けができる石階段のことであり、最上段には船を係留するための船繋石（ふなつなぎいし）が並んでいる。また、常夜燈は安政 6 年（1859 年）に西町の人たちの寄進により設置された灯台で、江戸時代に作られた石造り常夜燈としては日本最大級のものである。雁木、波止、常夜燈は御影石を活用して造られた港湾施設である。 （参照：福山市 HP） 雁木  波止 常夜燈

名　　称	特　　徴
宮島・弥山 （広島県廿日市市）	宮島（厳島）の中央部にある標高 535 m の山で、古くからの信仰の対象になっている。天然記念物に指定されている「瀰山原始林」は、針葉樹林に南方系の植物が混在する森で、ヤマグルマなどの原始的な植物を自然の状態で見ることができる貴重な場所となっている。標高 400m 以上の所では、ツガやモミなどの針葉樹とアカガシやウラジロガシなどの常緑広葉樹が混じった混合林が見られる。中腹から麓にかけては、アカマツを主体にシリブカガシ・タイミンタチバナ・ミミズバイなど常緑広葉樹が多い森になっている。多様な植物相をもつ自然の森の美しさと、巨岩奇石（曼荼羅岩、干満岩、風吹岩、賽の河原、岩屋大師竜穴等）が点在する変化に富んだ景観、そして眼下に広がる瀬戸内海の多島美を見ることができる。 （参照：廿日市市 HP） 弥山山頂
石城山神籠石 （いわきさん　こうごいし） （山口県光市）	瀬戸内海沿岸各地にある神籠石(古代山城)については、築造の歴史や目的がはっきりしておらず謎が多いことで知られている。 光市石城山にある神籠石は、光市と田布施町にまたがる標高 362m の石城山県立自然公園の中にある。高日ケ峰、大峰、星ケ峰、鶴ケ峰、月ケ峰の 5 峰を主峰として、その八合目付近を、土塁や門、水門などの遺構が取り巻いており、昭和 10 年（1935 年）に国指定史跡となっている。また山頂付近には、重要文化財に指定されている石城神社本殿が鎮座している。 （参照：光市 HP） 西水門

名　　称	特　　徴
二見夫婦岩 （山口県下関市）	二見夫婦岩は、山口県豊北と豊浦との境の、響灘を望む古くからの漁師町二見浦にある。 国道の脇の海岸そばに立つ夫婦岩は、神聖な岩として信仰され、二つの岩をつなぐしめ縄は、毎年１月２日に締め込み姿の男衆の手によって張り替えられる。響灘に夕日が沈む頃、岩と海と太陽があいまって作り出す風景は神秘的でおごそかな気持ちにさせられる場所である。（参照：下関市 HP）
久賀の石風呂 （山口県周防大島）	石風呂とは、石室の中で柴等を燃やして石を焼き、医療の目的で蒸気浴あるいは熱気浴を行うための施設である。 久賀の石風呂は、石を積みあげた上に粘土を塗りこめ、内部の土間もたたきになっているもので、海水をかけた海藻を焼けた石室内に敷いて湯気をたてる方式で蒸気浴を行う。最大幅 5.4m、最大奥行 4.65m、高さ 2.55mの石積式蒸風呂で、西日本最古の石風呂といわれている。近隣の人々の湯治場として昭和初年まで利用されていた。 言い伝えによると、1180 年平重衡によって東大寺が焼失。後白河法皇の領土であった周防国から木材を調達するため、1186 年俊乗房重源上人が任命され下った。用材は山口県徳地より切りだされたが、その間、この地に巡錫の折、石風呂を造ったといわれている。久賀の石風呂は西日本最大、最古のもので、昭和 33 年（1958 年）文部省の文化財重要有形民俗資料に指定された。 （参照：周防大島町 HP）
下請川南遺跡の石鍋 （山口県宇部市）	下請川南遺跡は国内で２番目に発見された石鍋製造跡である。滑石をノミで削って作った石鍋は西日本の中世の遺跡からよく出土するが、下請川南遺跡ではその未完成品や破損品が多数出土しており、ここで石から削り出す加工が行われていたと考えられる。

名　　称	特　　徴
住吉神社石造燈台 （山口県防府市）	住吉神社は、萩藩の水軍の本拠地である御舟倉へ続く入川（いりかわ）の河口に、海上交通の安全を祈願するために、正徳５年(1715 年)に創建された。 石造燈台は、その境内に文久３年(1863 年)に建立されたもので、基壇 389cm×384 cm、高さ 727cm におよぶ灯籠（とうろう）型の燈台である。竿（さお）の部分にあたる石積みには、建立にたずさわった世話人や石工、拠出者などの銘が刻まれている。 萩城に往来する表玄関の海上交通の安全に寄与してきた交通遺跡であり、史跡萩往還の関連遺跡として指定されている。 （参照：防府市 HP）
常山城跡 (岡山県岡山市・玉野市)	玉野市と岡山市とにまたがる標高 307m の美しい山で、古く内海の護りとしての山城が築かれていたという。 県下有数の山城で、天正３年（1575 年）の児島常山合戦で、城主上野隆徳が毛利勢に対して孤軍奮戦し、妻鶴姫が女房 34 人と共に敵陣に切り込んだ。この女軍奮戦は全国的にその例がなく、歴史物語にもとりあげられている。 現在でも、合戦時に兵士千人が隠れたといわれる千人岩や、城主上野隆徳が岩の上で切腹したと言われる腹切岩、華々しく最期をとげた女軍が眠る 34 柱の石碑のほか、石畳の旧路、底無し井戸、総門付近の石垣、本丸の石垣や見張台などもほとんど残っている。（参照：玉野の文化財） 常山千人岩 女軍の墓
御所ヶ谷神籠石 （福岡県行橋市）	「神籠石（こうごいし）」とは山中に列石や土塁、石塁で城壁を作った遺跡のことで、現在北部九州に 10 ヶ所、瀬戸内海沿いの地域に６ヶ所確認されている。明治 31 年（1898 年）に久留米市高良山の高良大社を囲む列石が「神籠石」として紹介されて以来、各地の類似した列石のある遺跡も神籠石と呼ばれるようになった。神聖な土地を囲む「神域」説と「山城」説で論戦が続いたが、戦後に各地の神籠石で行われた発掘調査により、列石がもともとは土塁の基礎であったことが明らかになり、現在では「山城」説が有力となっている。神籠石は「日本書紀」などに記録がないため築かれた時期ははっきりしないが、７世紀後半に築かれた記録がある朝鮮式山城の構造と共通していることから、これらと同じ時期に築かれたと考えられている。朝鮮式山城は史書に築城年などが記載されているもので、従来、神籠石と呼び分けられていたが、近年では一括して古代山城と総称することが多い。

名　　称	特　　徴
	７世紀後半は、朝鮮半島の三国のうち百済と高句麗が、新羅と中国の唐の連合に滅ぼされた時代である。660 年に百済が唐軍に滅ぼされ、旧百済の遺臣と倭（古代の日本）が復興軍を起こした。しかし、復興軍は 663 年に白村江で唐と新羅の連合軍に大敗し、倭は唐と新羅の連合軍が日本列島に攻め込むことを恐れて九州に 664 年に防人（さきもり）を配置し、水城（みずき）を築き、さらに 665 年に「大野城」「基肄城」667 年に「金田城」の３城が次々と築かれた。御所ヶ谷神籠石の発掘調査でもこの時期の壷が出土している。 御所ヶ谷神籠石は、行橋市の南西、みやこ町との境となるホトギ山（御所ヶ岳）にある。下の写真は「中門」の石塁で、1300 年以上の時を経てなお、高さ７m もの石積みが残っている。 「御所ヶ谷」という地名は、九州を訪れた景行天皇（12 代）がこの地に行宮（仮の皇居）を設けたとの言い伝えによる。遺跡のほぼ中央の見晴らしのいい高台に、景行天皇を祀る神社がある。 古代山城は、敵軍の侵攻を監視し、妨害するために古代の官道を見張りやすい位置に築かれたとされており、御所ヶ谷神籠石北麓にも大宰府と京都平野をつなぐ古代官道が東西に走り抜けている。福岡県の瀬戸内海沿岸の古代山城はこの他、築上郡上毛町の唐原山城などが存在している。 （参照：行橋市 HP）
臼杵石仏 （大分県臼杵市）	古園石仏大日如来像に代表される臼杵石仏（磨崖仏）は、平安時代後期から鎌倉時代にかけて彫刻されたと言われており、その規模と、数量において、また彫刻の質の高さにおいて、わが国を代表する石仏群であることから、平成７年（1995 年）６月 15 日には磨崖仏では全国初、彫刻としても九州初の国宝に指定された。 その数は、60 余体にもおよび、このうち 59 体が国宝となった。石仏群は４群に分かれ、地名によって、ホキ石仏第１群（堂ヶ迫石仏）、同第２群、山王山石仏、古園石仏と名づけられており、それぞれに、傑作秀作ぞろいであり、表情豊かな御仏の姿は、見る者の心にやすらぎをあたえてくれる。（参照：臼杵市 HP）  ホキ石仏 古園石仏

名　　称	特　　徴
熊野磨崖仏 （大分県豊後高田市）	鬼が一夜で築いたという伝説のある自然石の乱積みの険しい石段を登ると、岩壁に不動明王（８ｍ）と大日如来（６ｍ）が刻まれている。不動明王はどこか微笑んだような姿で、引き締まった表情の大日如来とともに、その神秘的な姿でやさしく出迎えてくれる。 これらは平安時代末期の作といわれており、国の史跡及び重要文化財に指定されており、鬱蒼とした山中にこれほど巨大なものを刻んだことは、当時の信仰の強さを物語っている。豊後磨崖仏の代表的なもので、日本最大級のスケールであり、約 10 年に一度行なわれる六郷満山の伝統行事である峯入りの荒行は、この不動明王の前を出発点とし、護摩を焚いて行程 150ｋｍ、約 10 日間の行に入る。 （参照：豊後高田市 HP） 熊野磨崖仏（不動明王）
石橋群 （大分県内）	日本の石橋は、その多くが江戸時代から大正時代までに造られた。著名な石橋研究家である故山口祐造氏の『石橋は生きている』（葦書房発行）では、平成４年時点で、日本に残っている石橋は 1,300 基以上、うち約 1,200 基、実に 90%以上は九州にあったことが示されている。なかでも、大分、熊本の両県は、367 基、330 基と特に多く、合計で九州全体の半数以上を占めている。 石橋を造る技術は、江戸時代に中国から沖縄・長崎へ伝わったといわれており、大陸から九州へ伝わったという点では、弥生時代の稲作や鉄などと同様であるが、稲作や鉄が伝来後、全国へと広まっていったのに対し、石橋の技術は、ほとんど九州のみで発達したようである。 （参照：農林水産省九州農政局 HP、九州の風土と石橋文化） 大分県、熊本県、鹿児島県には多くの石造りの橋が残されているが、大分県で石橋が多く造られている宇佐市院内町周辺では、細かな川や深い谷が多く、大雨による橋の流出を防ぐ必要があり、橋が無ければ近隣との交流ができないなどの地理的な要因と、阿蘇山の噴火で形成された溶結凝灰岩が多く産出したこと、石工が多く存在していたことから、多くの石橋が作られたといわれている。（参照：宇佐市 HP） 日本最長の石橋（耶馬渓橋、大分県中津市）

名　称	特　徴
	鳥居橋（大分県宇佐市） 一の橋（大分県宇佐市） 御沓橋（大分県宇佐市） 念仏橋（大分県宇佐市）
不老橋 (和歌山県和歌山市)	不老橋は、片男波松原にあった東照宮御旅所の移築に際して紀州藩 10 代藩主であった徳川治宝（橋が架けられた当時は 13 代藩主徳川慶福の治世中）の命により、嘉永 3 年（1850 年）に着工し、翌 4 年（1851 年）に完成したアーチ型の石橋である。この橋は、徳川家康を祀る東照宮の祭礼である和歌祭の時に、徳川家や東照宮関係の人々が新御旅所に向かうために通行した「お成り道」に架けられたものである。 橋台のアーチ部分については肥後熊本の石工集団の施工であり、勾欄部分については湯浅の石工石屋忠兵衛の製作と推定されている。勾欄部分には、雲を文様化したレリーフがみられる。 江戸時代のアーチ型石橋は、九州地方以外では大変珍しく、特に勾欄部分の彫刻が優れている。 不老橋は、平成 7 年（1995 年）に和歌山市指定文化財建造物に指定されている。 （参照：和歌山市観光協会 HP）

<table>
<tr><th>名　称</th><th>特　徴</th></tr>
<tr><td>砲台跡
（兵庫県他）</td><td>江戸末期には開国に向けて、海外から多くの船が日本に来るようになり、沿岸部の防衛を行うため、江戸幕府は瀬戸内海の和田岬、川崎（湊川）、西宮、今津（いずれも兵庫県）に砲台を設置した。砲台の外部は、花崗岩、内部は木材で 2 階建ての構造で作られている。現在、当時の状況で保存されているのは、和田岬砲台（兵庫県史跡）となっている。

和田岬砲台（兵庫県神戸市）

明治維新の後、明治政府は外国人から軍制の指導を受け、新たな砲台づくりを進めた。建設場所は、東京湾、対馬、下関、由良で、日清戦争を契機に、広島湾、芸予、佐世保、舞鶴、長崎、函館要塞の建設が進んだ。強固な構造を保つために、瀬戸内海で建造された要塞（砲台、兵舎、弾薬庫など）には、花崗岩が多く用いられている。

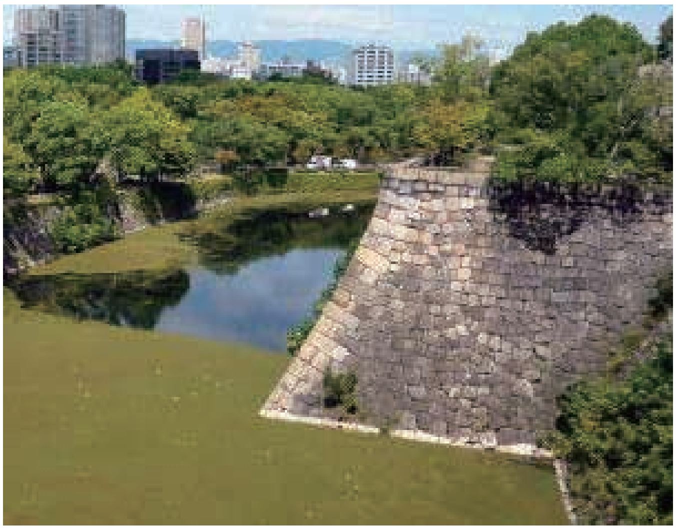
芸予要塞砲台跡（愛媛県今治市）

三高山砲台跡（広島県江田島市）</td></tr>
</table>

名　　称	特　　徴
	和歌山市友ヶ島の一つ沖ノ島には、砲台跡が点在している。明治政府により「由良要塞」として整備され、第二次世界大戦までの間は、一般の人々が島に近づくことは許されなかった。現在も、レンガ造りの砲台跡や日本で８番目に出来た洋式灯台（明治５年竣工）が残り、戦前の様子が偲ばれる。 (参照：和歌山県フォト博物館 HP)
水軒(すいけん)堤防 (和歌山県和歌山市)	紀の川の南岸の西浜に築かれた南北約 1.0km に及ぶ江戸時代の堤防跡。明治及び昭和の文献資料により、紀州藩初代藩主徳川頼宣の命を受け、寛永年間（1624～1644 年）に朝比奈段右衛門が工事を担当し、13 年の歳月をかけ完成したものとされていたが、その後の道路拡張に伴う発掘調査により、18 世紀後半の築造であったことが判明した。また、堤の北端部・南端部の確認調査により、堤防は海側に石堤、陸側に土堤を併せもつ非常に強固な構造体であり、高さは石堤が約 4m、土堤が約 5m で、基底部の幅は推定で 24m 以上にも及ぶことが考えられる。 築造の背景として、堤防東部の地域が、古代以来の名勝である和歌の浦と一体となった「吹上」の地であり、藩主が遊覧したり別邸を築いたりした西浜の地であることから、防潮とともに景観保持の目的であった可能性も想定されている。なお、道路拡張時の発掘調査により確認された石堤は、上部の６段まで（全体で 16 段のうち）が、南海水軒線の水軒駅跡地の水軒公園に移築保存されている。 昭和３４年（1959 年）和歌山県指定文化財史跡に指定されている。 (参照：和歌山市の文化財 HP)

名　　称	特　　徴
大多府（おおたふ）漁港元禄防波堤 （岡山県備前市）	大多府島は、元禄 11 年（1698 年)に岡山藩によって港が置かれ、諸藩の参勤交代の寄港地として賑わった。 大多府漁港に残る元禄防波堤は、現存する数少ない明治以前の港湾施設で、300 年以上経過した今もなお現役で活躍し、島の人々の生活に根付いた役割を果たしている。防波堤は、岡山藩の土木技術者・津田永忠の指揮のもと、石工河内屋治兵衛によるものと推定され、二段に石を組んだ直立式石積の構造に、優美な三次元曲面（かまぼこ型）を有し、合端（石と石の接合部の表側に近い部分）は密着して藩校として建造された閑谷学校の石塀と同様、頑丈で美しい外観を呈している。 (参照：国土交通省 HP)
保久良神社（灘の一つ火） （兵庫県神戸市）	社頭の石燈籠は「灘の一つ火」と呼ばれ、古くは眼下の海を往来する船の目印として、灯台の役目を果たしてきた。 昔は毎夜、麓の村の人たち(北畑天王講)が牛乳ビンなどに油を入れて訪れ、輪番で火を絶やさぬよう守っていたそうである。 (参照：神戸市ＨＰ)

名　　称	特　　徴
鍋島灯台 （香川県坂出市）	瀬戸大橋直下の与島に隣接する小さな無人島が鍋島であり、この島の頂に鍋島灯台がある。本灯台は、当時のイギリス商務省から推薦されたイギリス人技術者リチャード・ヘンリー・ブラントンにより建設されたもので明治５年（1872 年）11 月 15 日に完成している。明治期において、瀬戸内海には、外国人技師の指導で８基の洋式灯台が建設されたが、鍋島灯台は白御影石を使った石造り灯台であり、今なお現存し海の安全を守っている。また、鍋島灯台は文化遺産としても高い評価を受けており、経済産業省による「近代化産業遺産群」として認定されている。 （参照：高松海上保安部ＨＰ） 同時期に建設された石造の灯台として、江埼灯台（兵庫県淡路市）、釣島灯台（愛媛県松山市）、部埼灯台（福岡県北九州市）などがある。 瀬戸大橋と鍋島灯台

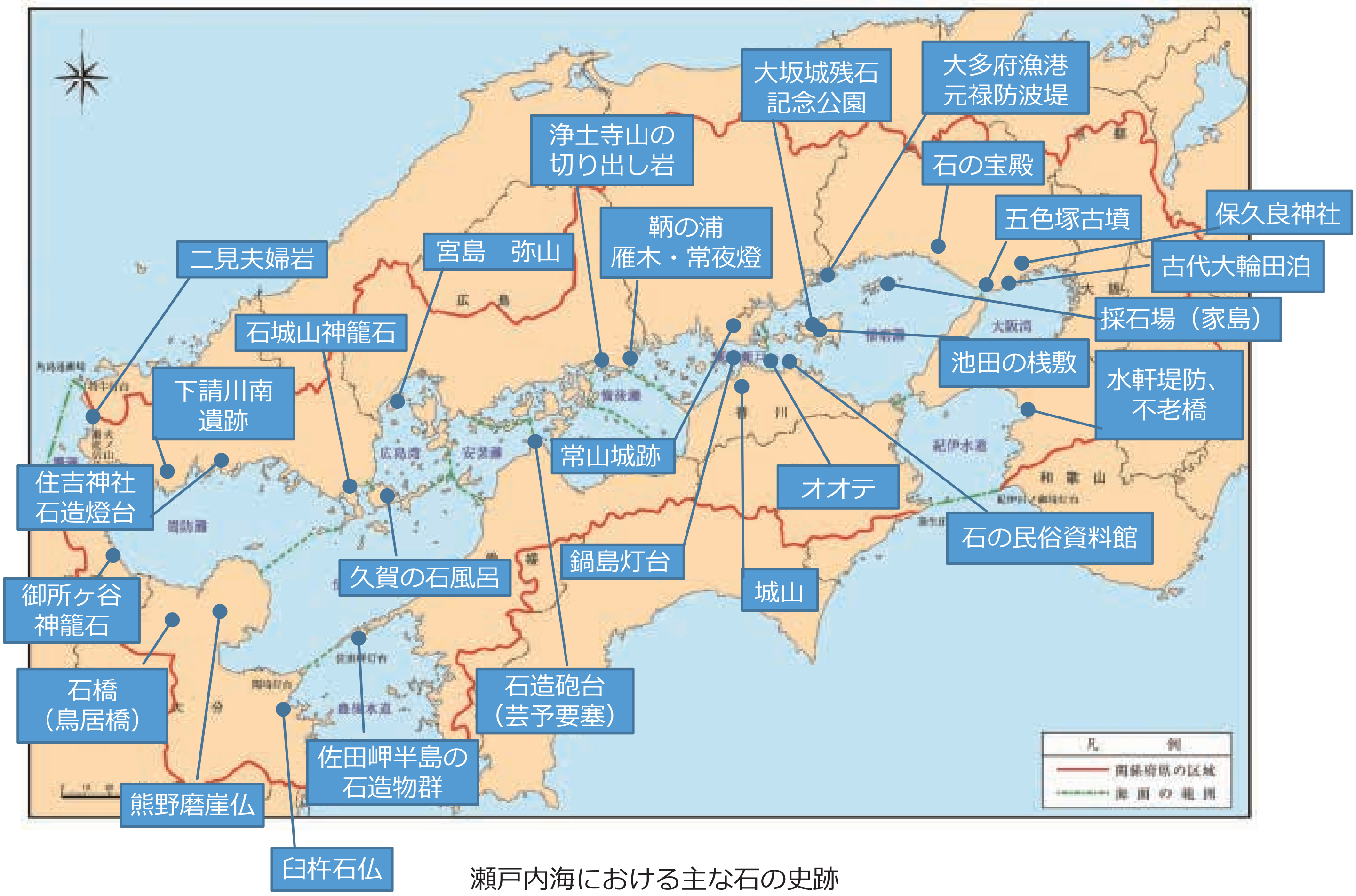
名　　称	特　　徴
採石場	瀬戸内海における石垣作りは７世紀後半に朝鮮半島における百済滅亡の時期から始まるといわれている。唐、新羅軍が日本に攻めてくることを想定し百済の技術者により朝鮮式山城が築かれた時に、日本初の城の石垣が誕生した。その後、元寇の時期に鎌倉幕府は、博多湾沿岸に「石築地（いしつじ）」と呼ばれる石垣堤防を作らせた。本格的に城の石垣が作られ始めたのは安土桃山時代以降で、織田信長が滋賀県にいた石工職人の穴太衆（あのうしゅう）に安土城を作らせたことから支配地に石垣作りの城が作られ始めた。豊臣秀吉が築城し徳川家康が再興した大坂城の石垣が日本最大のものとされている。また、西日本の城に石垣が備わっているのに比べて、東日本の城には小規模の石垣が見られるに過ぎない。この石垣に用いられた石材は、ほとんどが花崗岩でできており、固くて丈夫なので、城の土台としての石垣に最適であった。  現在の大阪城の石垣 大阪城最大の石（蛸石）

<table>
<tr><th>名　　称</th><th>特　　徴</th></tr>
<tr><td></td><td>
近代においても石材の用途は建築資材として活用されてきており、北木石は日本銀行本店、靖国神社鳥居、明治生命本社などに、国会議事堂の建設に倉橋島、黒髪島の石が使用されている。
花崗岩は瀬戸内海沿岸各地から大量に入手でき、海路を利用して運ぶことができたので、陸域よりも島嶼部で盛んに採掘されてきた。主な採石場としては、兵庫県姫路市の男鹿島、西島、香川県の小豆島、豊島、与島、小与島、櫃石島、広島、岡山県の犬島、白石島、北木島、愛媛県の伯方島、大三島、大島、広島県の江田島、倉橋島、山口県の浮島、大津島、黒髪島などがある。

兵庫県家島（男鹿島）の採石場

大島石採石場（愛媛県今治市）

北木島採石場（岡山県笠岡市）
</td></tr>
</table>



瀬戸内海における主な石の史跡